
小説 祈り

hentai be-sisuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説 祈り

【Nコード】

N3307P

【作者名】

h e n t a i b e - s i s u t o

【あらすじ】

短編小説です。 短編です。

祈り

「そういえば、私の『神様仏様』は結構あたるんだよ」

とりあえず私のジंकスを自慢してみる。へえーっていう素っ気ない返事が返ってくる。

お弁当を食べ終わった昼休み。私の友達が委員会で教室にいないから私は後ろの席の　に話しかけた。　は読書をしていたが、私が席に着くと顔を上げたので、言ってみたのだ。『神様仏様……』って祈ると本当に良くあたるのである。ちよつとした超能力でないかと少し自分でも疑っていたりする。

「ホントに結構あたるんだよ？　昨日の国語の小テストだってよかったじゃん。あと先週の小テストもよかったしね」

「それはただ国語が得意なだけじゃないか？」

それは一理あるかもしれない。じゃあ、と私は言って、先週の金曜は雨が降ったし、木曜は国語の時間教科書を使わなかったし。水曜は、先生が順番であててるのに、私だけ飛ばされることもあったし」

「そうかい、そうかい」

流された。本に目線を落とされる。

ちなみにこいつは昼休み一人でいるけど友達がいらない訳じゃない。今も教室の片隅で読書をしてる友人がいる。本当にご飯を食べている間だけ一緒にいて、その友人は食べ終わると自分の席へ戻って読書をする。そうするとこいつも読書をする。移動教室の時よく話しているようだから、仲が悪いつてわけじゃなさそうだけど。

「そのジंकスにはね、一つ制限があるのですよ」

ほう、と　は言って視線を上げて、私の目と合った。

「その心は？」

「一日一回しか使えないのです」

私は少し含ませた言い方をしてみた。

「どこかのアニメの誰かにいつだか使われてそうなのかなのような気がなぜかするね、そりゃ」

苦笑交じりの返答だった。私はさっきと同じ口調で、

「じゃあ、何か祈ってみせましょう」

「ふむ、では何かお願いをしましょうか」

が同じノリで相手の手を入れてくれる。

思いついた私は、あ、と言って、

「今日、　　が足の小指をぶつけるって祈っとくわ」

なんだかとてもあたる気がする。

「はっ、それは上等だねえ」

口端を上げて、　　が答える。瞳が活き活きしている。

「それならどっちの足の小指だい？　右、左？」

が条件を厳しくしようとする。意地の悪いやつだ。

「私としては、　　が小指ぶつければいいのよ。それだけ」

「でもどっちかって言うってどっち？」

なおも　　は食い下がってきた。私はふん、と鼻を鳴らして言うてやった。

「思いつきり強くぶつけるわ」

次の日の朝。席にいた私に、　　は荷物を机に掛けながら言った。

「おい。あたったよ、あたった。ドアにぶつけちゃったよ」

喜々として話しかけられる。本当にあたっちゃったのかと私は内心驚いた。　　は私があつて言う前に続けて言った。

「思いつきりぶつけた時、マジ笑ったよ！　まじで。ホントに笑えたなあ。ヤバいほど笑った。あんなに笑ったのは二週間ぶりくらいかな」

そう言う　　はすごい笑顔で笑ってた。私は小指をぶつけてそん

なに嬉しいものかなと疑問に思った。

「どっちの足だったの？」

私は聞いた。

「右だよ、右。右って祈ったのか？神様仏様に」

「別に。ただ強くぶつかれて祈っただけよ」

それにしても　は嬉しそうにしている。気持ちが悪い。そんなに嬉しいなら毎日指をぶつければいいのにね。

「なんでそんなに嬉しそうなのよ？」

「え？　ああ。そりゃあ普通じゃありえないからだよ。確率が低いことが起きると無条件で笑えて仕方ないんだ。言ってもわからんだろうけど」

ふーん、と私は相槌を打つ。本当によくわかんない。

「じゃあ、もっかいやってあげようか？」

私の提案を　はあっさり断った。

「いや、いいよ。一回だけやってくれりゃあ十分。それに二回目は無さそうだし」

「そうね」

私も成功しそうな気がしないし。そして、そういうときはあたらなのいだ。あたりそうもないなあとか思っちゃうと祈っても決してあたらない。その時の感情というかノリがないとあたらないってこともなんとなく実感してるし。

「いやー、それにしてもすげえなあ。まじあたっちゃうんだもんなあ」

なんだろう。褒められてるのか、どうなのかだけど、ここまで言われると微妙に恥ずかしくなってきた。

私は話をそらすことにした。

同じ日の昼休み。私はひとしきり友達と話をしちゃって、昼休みも終わりに近いから使っていた席を戻して、自分の席に戻った。なに

かのお菓子を食べながら本を読んでいる　　に話しかける。

「なに食べてるの？」

何か分かってるけど、とりあえず聞く。

「トッポ」

短い答えが返ってくる。そう、と答え、一拍置いて私は尋ねる。

「一本食べていい？」

うい、と　　は本に目を落としたままうなづいた。

私はホイホイとトッポを一本つまんで、ポリポリかじる。かじって
いてふと思いつく。

「そういえば、この前すごいおいしいお菓子食べたんだ」

「ふむ」

「明日持ってきてあげようか」

そこで　　はやつと顔を上げた。耳がぴくつて動いた気すらするけどね。私は魚を釣りあげたような気になった。

「おお、そりやありがたい」

「じゃあ、持ってきてあげるよ。お楽しみに」

ははー、よしなによしなにー、と　　が言う。前と後ろ合っていないから。

学校から自転車で帰っていると、そういえばお菓子の約束があったことを思い出した。少し道を外してコンビニに向かう。あるといいなあ、と思いつつ、こういう時こそ神様仏様だね、と一人で勝手に納得する。そして自転車をこぎながら、祈るのだ。

果たして、コンビニに目当てのお菓子は置いてあった。やった！
ラッキーと心の中で手を合わせた。

良い気分でコンビニを出て、軽快に自転車を飛ばして家に帰った。

少しして、我が家が私の目に入ってきた。ふーと息をついている

と、家の前に一人女の人がある。タクシーもある。近くに寄ると近所のおばさんだった。なにかそわそわしている。そして私を見つめているようだ。

私は自転車で近づきながら、少し遠かったけれど声をかけた。

「どうかしましたか？」

おばさんはとても落ち着きがなく、それでいて口から言葉を出すのに戸惑っていた。私はおばさんの近くで自転車にまたがったまま口が開くのを待った。おばさんは躊躇いながら、言いにくそうに言った。

「あのね、ちゃん。あの、お母さんがね、事故に遭ってね。今病院で、重症らしいって。だから、このタクシーで病院にいきましよう」

はっ！？ 頭の中は一瞬でクラッシュしたけど、私は迅速に動いていた。自転車を私の家の敷地の中に停めて、鍵をかけて、タクシーに乗り込んで、病院に行った。

車のなかではなにも考えられなかった。そんな、まさかって考えがくるくる回って、頭が真っ白だった。車の外の景色も、車の中の臭いも、隣のおばさんも、なにかもが私を刺激しなかった。病院の建物がちらつと視界に入った時、はっとした。ざわざわとした胸騒ぎが下の方から湧いてきて、病院につくまで私を浮足立たせて、時間を長く感じさせた。病院に近づくにつれて、私は焦り出して、その焦りはどんどん私の中で大きくなっていった。タクシーがどこに停まるの、どこに着けるの！って声にしないで叫んだ。

タクシーが停まって、支払いの後でしますのとおばさんが断って先に降りて、こつちと、言った。私はおばさんの後について、小走りで外来用の入り口に向かった。おばさんが案内係に場所を聞くと、ナースさんが出てきて速足で道案内をしてくれた。病院の臭いが私の中のざわめきをひどく大きくさせた。

緊急の手術室の隣の部屋に案内されて、そこにはおにいちやんがいた。三つ並んだベッドの一つの傍のパイプ椅子座っていて、私を

見ると立ち上がった。私は駆け寄って、聞いた。

「お母さん、どうなの？」

おにいちゃんは顔を苦くして、

「よくはわからない」

とだけ答えた。

私は治まらず、もう一度聞いた。

「お母さん……どうなのよ」

厳しい顔のお兄ちゃんが私の目をじっと見つめて言った。

「……状態が良くないってことと、危ないって事以外、分からない」
私はふっと脱力したようにこわばった頬が緩んで、目尻に涙が浮かんだ。息を呑み込めなくなって、体はこわばって動かなくて、私はその場に立ちすくんだ。

しんと静かな部屋の中おもむろに、お兄ちゃんはまた元のパイプ椅子に座り、腿に肘をつけて手握り合わせ、額をのせた。おばさんは私の背に手をそつとあてて、おにいちゃんとベットを一つ挟むようにしてもう一つのベッドに私を座らせた。私をベッドに座らせてからおばさんは少し離れた場所で、うつむいていたが、しばらくして部屋を出て行った。

部屋の中はしんと静まり返り、病院の独特の臭いがしていた。私はただ、うつむいて、自分の靴下とローファアの間の辺りを見つめていた。何も考えていなかった。頭の中は真っ白なホワイトボードをずーっとただ見つめているような状態だった。まるで血の流れる音が聞こえてきそうな空虚さの中に私はいた。

ガシャンと大きな音が隣でした。私はビクツと身を縮め込ませた。顔を手術室へのドアに向けて、そこで意識が戻った。いろいろな思考が溢れ出し、不安が頭の中を埋め尽くした。感情が吹き荒れて、私は頬がこわばり、涙が眼に溜まった。

お母さんが死んじゃったらしようって、私は手をぎゅっと握

り合わせて、お母さんが生きてくれる事を祈った。おかあさんの事だけをただただ、祈った。不安なんて無視して祈り続けた。お願いです、お母さんが無事でありますように。お願いします。お医者さんがんばってください、お母さんを助けてください。お母さん生きてください。神様仏様、どうかお母さんが一命を取り留めるようにしてください。お願いします。どうか、死なないようにしてください。どうか、一命を取り留めるますように。お願いします。生きてください。お母さん、お母さん、お母さん。だれか、神様仏様、助けてください。神様仏様。

ここでジंकスを思い出した。くだらないって私は一蹴した。しよせんくだらない考えだって、どっかに放り捨てた。でもいくら必死に祈ってもしこりが残って、それが不安をどんどん大きくしていった。しよせんジंकスだって言ったって、一日一回とお母さんの生き死になんて関係ないって。でもそう言い聞かせても言い訳じみていて。なにか私はどうしようもなくなってきて、お母さんの事を祈ろうとしても、なんか上手くできなくて、私は混乱していった。そのうち後悔し出して、どうしてあの時祈ったんだろうって思いだして、でもそんなの下らないって否定もして、ジंकスなんて嘘だって、まやかしかだって必死に思いこもうとして、それで祈って。でも、混乱しちゃって。あんなお菓子の約束するんじゃないかとか後悔までして、そういうのが嫌で嫌で、関係ないのに思っちゃってでも、どうしようもなくて。それでも祈ろうとして。不安で、不安でたまらなくて、体中がぞわぞわしてきて、重いものを強く強く押しつけられたような気がして、私はくしゃくしゃになっていった。泣きだしたくなって、頭をくしゃくしゃに掻きむしりたくなって、体中汗ばんで、手なんてべとべとで、もうなにがなんだか全くわからなくて、そんな状態でいて……。その時にお兄ちゃんが私の前でしゃがんで、私の手をそつと両手で包みこんで切ない笑顔を見せてくれて、それで私は全てがすつと引っ込んで、ひつくって一回しゃくって、泣きだした。涙がボロボロ溢れてきて、何度もしゃくりあ

げて泣いた。それからしばらく泣いて、嗚咽もだいぶ治まってきた時、手術室のドアが開いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3307p/>

小説 祈り

2010年12月6日03時48分発行